

社説

日本銀行所有の黄金

日本銀行は政府と預金勘定に由り英、蘭、銀行に預入れたる英貨を併せ約八千二百萬圓の金貨及び金塊を所有し其内八千圓餘は兌換銀行券の引換準備に充るもの如し而して此八千餘萬の金は準備總額一億五百萬圓の内殆ん全に當り銀は僅かに二割を占むるに過ぎず本邦兌換銀行券は銀に對して發行するものなれば之が引換準備に銀以外の物品を所有するものと既異異なるに其銀以外のもの即ち金と名くる物品が全額の内割を占むるは甚だしく以て異數を爲さざるを得ず...

くし以て其營業上に大危險を冒せし強ゆるの理は萬々ある可らず我輩の固く執て不可とする所なり然らば則ち之を如何せんと云ふに政府は自ら要する所の黄金の額を定め之に相當するだけの銀を借金中より買収して之を日本銀行に授け其代りとして銀行現有の金を引揚げて可なり斯くすれば銀行は時價不定の黄金を抱て時として利し時として損するが如き冒險の苦を免かれ政府も亦萬一に備ふる基金を得て大安心の場合に至る可し事甚だ簡單なれども或は期る大金を徒に國庫中に閉却せしむるは經濟の法に非ずとの説もあらんか、然らば則ち時宜事情を觀察し其幾分を擴充正金銀行に貸付けて運用を許すも前年松方大臣が爲換正金銀行に貸したるが如くなるも自から妙ならん其方法は幾帳にも決して窮するのみならず可し是は慎重な都台と銀行の業務とを混同して日本銀行の爲めに危殆なる金を所有せしめ其基礎を危からしむるを以て不可と爲すのみならず、

しだら電 (三十一)

第十九回 嫉妬 (上) 卑産生 譯

十五分後ステパイン、リッターノフはワンダの部屋に來りぬ。恰もレイモン、シャメルはモチヂアより、紙物たる紙包を携へ來りてありき。リッターノフは極めて自重して見たりき。されど其室に入てレイモンの姿を見るや二年間内祖せし憎火は、燃ゆる事も出来ず、鼻孔を腫はして上唇を反らしぬ。レイモンは却て愕然としぬ。果は心中に思ひぬ。何んぞ、此野蠻人は。此奴、嫁にござつてゐる様だが、無作法な不禮儀を異例をしがやがる。ふれちやア連も、眼も、はてナ、嫁が惚れてゐるかしら。鬼も角、爰は外して新米の客に席を譲るが上分別と考へしが、眼に見えぬ力が引留めて心ばかり歸らうとして中々腰は立たぬ。けれども何時まで躊躇も可笑しなものなれば終に断然決心して苦々しき聲にて詠別を告げぬ。『では、單う御用は有りませんなう。』

「何でござんす？」 「今の佛蘭西人サ。」 「あれは技師。」 「何處で見掛けた様だ。」 「ナンな事はありますまいよ。露西亞にはまだ半歳さりのやませんもの。第一メートルブルグにははんの昨今ですよ。」 「貴嬢は能く知つてるの？」 「エエ、知つてます。あの人は今度南露西亞に鐵道を敷設しやうといふので、其鐵道は父の領分を中興しませうから是非とも懇意になるわけなんです。それに、あの人は我々同志の一人ですよ。」 「リッターノフはレイモンが驚かせし紙包に手を掲げてワンダの顔を見守りながら、『是は社會黨の冊子ですか？』

「左様ぢやありません。」 「では鐵道の設計でせう。ウクライナ地方には僕の地所もあるから此鐵道には中々關係ある。如何でせうナ、設計書なら一つ見せて戴きたいもんだが。」 「設計書ぢやありませんよ、手紙ですよ。」 ステパインの顔は蒼くなりぬ。 「ステパイン！如何したの？」 「如何もしませぬ、自分の馬鹿に初めて氣が附きましたよ。」 「云ひつゝ、リッターノフは衣兜から一束の紙幣を出して、『さア、爰は十萬ルーブルあります、之を其の事業に充て下さい。猶ほ僕の財産は擧げて悉く納する積りでありますから、今日は之で失敗します。』と云つて突と歸らんとしたりき。」 「さア、お待ちなさい。」 「何御用です。』と云つてリッターノフは眞向にワンダの顔を見つめぬ。 「氣が狂ひましたか、ワンダは云ひぬ。」 「氣は確かです、御心配なさい。」 「ステパイン、リッターノフは暫くリッターノフの顔を覗き凝視して後、何故貴君は打明けて仰しやらない。妾はちやアんと知つてます。」 「何を？」 「貴君の心を……詰らない邪推を編するんぢやありません。」 「いや邪推ぢやない、リッターノフは氣まじりの眼をさうな顔をして、『邪推といふんぢやないが、あの男は貴嬢に對して、僕が来たのを妬いて歸つたのでせう。貴嬢は嫉妬をやく權利を與へたんですか？』

動物園の大喧嘩